



## 開業顛末記

～親子二代～

ましどり整形外科 真志取 浩貴



開業して1年6ヶ月になりました。勤務医時代は週に2～3回の外来を担当し、入院管理、手術とバリエーションにとんだ症例と戦っていました。開業した当初は、月から土曜日までずっと座りっぱなしで外来をこなすので、同じ姿勢が続くため、お尻が痛くなり、肩こりや頸部痛に見舞われる始末でした。しかし最近沖縄口にもなれ、ようやくおじいちゃん、おばあちゃんの会話にもなれてきました。もともと父が昭和47年から開業していた診療所を平成19年に私が管理者となり今も父と一緒に診療をしています。父の古くからの患者さんは今も来院してきますが、一番恥ずかしいことは、私の幼少の頃を知っている患者さんの診察です。「今日はどうしましたか」と質問すると、「あんたはあの息子さんね？あんなに太って、うーまくーだったのに」とか「よく診察室で遊んで大先生に耳を引っ張られて自宅へ帰されたあの息子さんね」と逆に質問攻めにあります。私は都合の良いことに(?)昔の事をほとんど覚えていません。しかし、古くからの患者さんは私の行動を覚えています。幼稚園のころ募金箱(おそらく自分への募金だと思う)と書いた箱を持って患者さんの財布を指さしていた事や、向かいにある商店でお菓子を無理やり買ってもらった事など。外来中に赤面するほどは恥ずかしい。あの子が今は跡継ぎになって!といわんばかりの笑顔で話します。しかし、決して嫌ではありません。むしろ嬉しいのです。何せ約30年も前から何かあれば当院に通院されているのですから。勤務医時代はそんな体験は無かったです。父はあたり前の事のように話していましたが、

自分にとっては不思議でした。当院の事務さんも十数年勤務しているため、患者さんの家庭事情をよく熟知しています。開業してから特に思うことは、開業医は患者の病気だけを診察するのではなく、その方の背景も知るべきだと感じました。いろいろな理由で当院に受診されます。勿論体に異変があるからではあるのですが、いわゆる病気なのか、または精神的なものなのか。その患者さんの家庭事情まで考えて治療することがbestな治療につながるがしばしば父の治療を側で見て経験しました。勤務医時代では数分程度の診察ですべてを把握しなければいけなかったのですが、今では、ゆっくり腰をすえて診察をしています。注射をしながら「おばあちゃんは最近どうね?」、「おじいちゃんは退院したあと食事はとれているの?」とその家族の健康状態を会話の中から把握していきます。そのことで患者さんとその家族の事がわかってきます。かかりつけ医とはこの様なことから関わりをもつものだな、と思うようになりました。

親子二代で診療している医院は少なくはないと思います。父が医師であることは、幼少の頃から勿論知っていましたが、まさか一緒に働くことは想像はしていたものの現実になるとは。昔は勉強を父から習っていたのですが今は患者さんへの思いやり、可能な限り手助けをすること、それと忍耐を教わりました。面と向かって言葉で言われたわけではありません。側にいながらそう感じるようになりました。大病院で働こうと小さい医院で働こうと、患者さんを思う気持ちは同じです。まだまだ父から学

ぶことはいっぱい残っていますが、焦らずにゆっくりとこれからも父と一緒に頑張っていこうと思います。

今は与儀班の評議委員を担当しています。ほんとに世間知らずの私は、医師会のことなどまったく知りませんでした。最初の与儀班の会合で沖縄赤十字病院の副院長である知花朝美先生に「医師会に入会する意味は何でしょうか」と今考えるとかなり失礼なことを言った記憶があります。実際に評議委員会に参加してみると大変勉強になります。今の医療、これからの医療に対して様々な意見が飛び交います。徐々に医療を取り巻く世の中の事が解ってきました。そして月に一度の与儀班の二水会の幹事もやっており、そこでは医療以外のことも話題に上ります。政治や経済など、もっとも私の苦手な世界の話が出ますが、聞いているとそーなんだ！と思うことが多々あります。楽しい勉強会に参加している感覚で、私個人的にはとても二水会の存在に感謝しています。与儀班の先生方の二水

会参加をお待ちしております。

こんな私ですが、これからも宜しくお願いたします。

